

近世期可能表現における評価的用法

三宅俊浩（名古屋大学人文学研究科博士課程後期課程）

要旨 本稿では、可能表現が時に評価を表すことに注目し、歴史的な観点から考察を行う。近世におけるレル・ラレル・可能動詞・デキルの四形式を対象に調査した結果、次の三点が見出された。①可能動詞とデキルには近世に評価を表すと認めてよい確例があるが、レル・ラレルには確例が見られない。②可能動詞とデキルが評価的な意味を表す場合、専ら肯定形で現れる。古代語の可能文は圧倒的に否定文に多いことが知られており、近世期においても例外ではないが、この評価的用法は肯定形で多く現れる点にその統語的特徴がある。③可能動詞の評価的用法は動作対象に対する評価を表わすが、デキルの評価的用法は動作主に対する評価を表わす点に相違が観察され、この特徴は現代語においても同様である。

1. はじめに

現代日本語における可能表現は、「話せる上司」「この酒はなかなか飲める」「使えない部下」といった形で、時に評価的な意味を表すことがある。こうした例は日本語母語話者にとって、動作主の「話す・飲む・使う」行為の実現可否に重点があるのではなく、「上司」「この酒」「部下」の性質に対する評価に焦点があると感ぜられる。

本稿がどのようなものを「評価的用法」と認めるかについては、後に 3.1 節で条件を設定する。その条件に合致するものを本稿では「評価的用法」と呼ぶことにする。逆に、評価的用法を持つとは認められない可能表現を、「非評価的用法」と呼ぶ。

可能表現における評価的用法は、現代語においてはその特徴についてしばしば言及がなされるが、歴史的な問題として正面から取り上げられたものはない。本稿では評価的用法を取り上げ、次の問題の解明を目的とする。

○評価的用法は、歴史的に全ての可能形式において認められるものか、一部の可能形式にのみ認められるものか、あるいは認められないのか（現代語のみの用法か）。

○全ての、あるいは一部の可能形式にのみ認められる場合、非評価的用法と比して、どのような特徴を有するか

以下、これまでの研究で明らかとされた点を確認するため、先行研究における記述をみていくことにしよう。

2. 先行研究

2.1 松下(1930)

可能表現が「評価」の意味合いを表すという指摘は、管見の限り最も早いものとしては松下(1930)に見られる。松下(1930)では以下のように述べられる。文中の二重線は原文の通りである。

此の酒は一寸飲める。(以て飲むに足る) 彼の男は全く話せない男だ。(以て語るに足らず) 此の筆は中々書ける。(以て字を書するに足る) 二度と見られた顔ではない。(再び見るに堪へず)

の「 」は価値の被動である。「飲める」は酒の飲むに足るべき価値を表し、「話せない」は彼の男の語るに足るべき価値を否定に表す。(中略)「飲まれる」といふ被動がどう

して主体「酒」の価値を表すか。一般人が飲み得る酒は飲むに足る酒価値ある酒である。飲むことに対する一般人の可能は酒の価値である。そこで「飲まれる」といふ被動に於て飲む人が一般人であって而もその観念が注意されない場合は酒の価値を表すことになる。「此の酒は飲める」に於ては「飲む人」は一般人であって而も注意されてゐない。(中略) 価値の被動になるのは一般人であって而も注意されない場合である。故に価値の被動には「れる」「られる」に対する客語を用ゐない。客語を用ゐると客体の能力を表すから可能の被動になる。

上の記述は、「飲める」等が、「一般人」つまり特定でない人物(誰でも)にとつての可能を表わす場合、誰にとつて可能であるかという情報を捨象し、さらに当然であること(酒が飲用可能であること、男が発話可能であること)を敢えて可能表現を用いて述べることで、評価・価値が付されることを述べている。可能表現が「評価」をあらわす場合があることの指摘だけでなく、動作主が不特定であるという条件に関する指摘がなされており注目できる。しかし、断片的な指摘に留まっており、より精密な観察に基づく再検討の余地を残している。

2.2 渋谷(1993)

これらの現象をより深く考察しているものとして、渋谷(1993)が挙げられる。渋谷(1993)は、可能表現がテンスから解放されている点、いわば形容詞化している点に注目し、その形容詞化の段階を以下に引用する(i)(ii)(iii)の三段階に分けて整理している。例文は渋谷(1993)からの引用であるが、用例番号は本稿の通し番号に改めてある。

(i) 動作主体・対象などの一時的な状態を表す段階(「一時的状態段階」)

(1) 太郎はこのところ快調に勉強できるらしい。

(ii) 動作主体・対象などの恒常的な(内在的)属性を表す段階(「恒常的属性段階」)

(2) 人間は空を飛べない。

(iii) 動作主体・対象などの恒常的な(内在的)属性に対する評価を表す段階(「評価的属性段階」)

(3) あいつはなかなかできる。

本稿で扱う「評価的用法」は(iii)に該当する。渋谷(1993: 22)では可能表現が評価的な意味合いを持つ理由として、以下のように説明される(「引用者注記」を付さない丸括弧は原文のままである)。

もともと日常的な知識をベースにしつつ、余剰的な内容を持つ命題から推論された語用論的な意味(会話の含意)にその起源をもつものである。(中略) 皆そのこと(引用者注記: 「あいつは話せる」という文を例にすれば、人間であれば通常は発話可能であるということ)を日常的な知識として知っているわけであるから、そのこと(あいつは話せるということ)自体を伝達しても情報としては何も聞き手の知識に新たに加えることはない。そこでそのような発話を聞いた聞き手としては、協調の原理にしたがって語用論的な推論を行うことによって何らかの意味(この場合には評価的な意味)を引きだすのである。

この記述を、先の松下(1930)の説明に即していえば、例えば「酒」は飲用しても問題ないものであるというのは自明のことであり、その酒に対して「この酒は飲める(飲用可能だ)」と言っ

たところで伝達内容としては何も言っていないことと等しい。そこでその発話に対し聞き手が語用論的に余剰的な内容を見出すことで評価的な意味が加わるということだろう。

さらに渋谷(1993)は、評価的な意味を表わす可能表現が、通常の可能表現とは異なる諸特徴を示すことを指摘した。渋谷(1993)の挙げる五つの特徴を以下に引用する。

- ①程度副詞と共に起ること（あいつはとても話せる（男だ））
 - ②比較の「ヨリ」と共に起ること（佐藤先生は伊藤先生より話せる（先生だ））
 - ③評価の意味を表す場合の「デキル」は、本来対応するはずの非可能形「スル」と対応しない場合があること（おぬし、できるな（#おぬし、するな））
 - ④動作主体の属性を述べる可能文の場合、もとの動作主体をマークする格に、二格が用いられない（#おぬしにはできるな）
 - ⑤可能動詞形（時に助動詞ラレル形）が多く、他の可能表現では置き換えられない。特に分析的な形式であるスルコトガデキルで置き換えることは不可能である。
- (4) この魚は食べる／?食べられる／*食べることができる（「うまい」の意）

①～④は統語的な特徴である。可能表現とは、ある行為が可能あるいは不可能であることを表すわけであるから、通常はそこに程度性はない。しかし、それが評価を表しているならば、程度副詞や比較の助詞を伴うことが許容される。このように渋谷(1993)は統語的な特徴の整理まで踏み込んでおり、現状では最も周到な論である。

⑤は一律に全ての可能形式で均一に見られるわけではなく、可能動詞に多く、スルコトガデキル形では表せない、という形式別の特徴を指摘したものである。

以上のように渋谷(1993)によって、従来は語用論的な意味として指摘されるのみで正面から扱われることが少なかった可能表現の評価的用法の統語的特徴が整理されたことで、通常の可能表現との差異が明確になった。また、可能形式によって評価を表しやすいもの（可能動詞）と表せないもの（コトガデキル）が明確に示された。

一方で、このような統語的特徴がなぜ見出されるのか、またそのような特徴はいつごろから見られるのか、それ以外の特徴はないか、といった点についてはなお検討の余地があるように思われる。また、可能動詞に多いという指摘がある（上の⑤）が、その理由についても検討の余地がある。以上の問題を明らかにするには、各可能形式の歴史的な使用実態を確認する必要があるように思われる。

そこで本稿では、可能表現の評価的用法を、歴史的に眺めることにしたい。そのためにはどの時代を観察するか議論が必要となる。（ラ）レルの前身である（ラ）ルは中古以来存在するため本来は中古から観察を始める必要があるが、本稿では近世期を中心に引き上げたい。その理由は主に二つである。

まず、評価的用法は可能動詞に多いという渋谷(1993)の指摘に関わる。可能動詞は近世期に発達が著しい形式であるため（青木 2010）、近世期を中心に引き上げる。また渋谷(1993)では「あいつはなかなかできる」「おぬし、できるな」のようにデキルが用いた例が挙げられている。可能動詞と同様、デキルも近世期に可能形式として発達する形式である（鶴岡 1967、原口 1985）。以上の理由で、本稿では可能動詞およびデキルが成立から定着に至る近世期を観察することに

する。

3. 用例認定の基準と対象とする可能形式

3.1 用例認定の基準

まず、対象とする用例の認定基準について述べる。近世語は現代語に近く、ともすると現代語を解釈するような感覚で判断しても解釈が成り立つような例が見られる。ただし、語用論的に付加されうる評価的用法の場合、内省判断が正確に効かない近世語を判断するのが困難であることも事実であり、認定を誤る恐れがある。例えば、渋谷(1993:101)が近世期の可能動詞のうち「評価的意味を表す」と認定する次の例を見てみよう。

(5) おらア昔の面影もなし、当時おあてがひときてゐるからはなせねへはな。銭がつかへねへので抛なく老実さ (浮世風呂 四・中)

(6) サアそふ聞いたら、たまらなくなつて来た。眼公々々、ちよいと何ぞのめるものをす。 (八笑人)

(7) (伊)「なんぞくへる物がござんすかね」(加)「いゝにやモウ、やつぱりタベの通りじやはいナ」 (道中粹語録)

たしかに以上の例はそれぞれ「話にならないくらいひどい」「おいしい酒」「おいしい料理」のような解釈を許し、評価的用法として認定し得る可能性がある。しかし、これを評価的用法として認定する根拠は「そのように解釈できる」という点であって、真にそのような意味であったのかを明らかにするのは難しい面がある。本稿では慎重を期したいと思う。

そこで、客観的な基準によって確例を抽出する方法を採る。ここでは、渋谷(1993)にあげられる統語の特徴が現れている例を対象とする。すなわち、①程度副詞によって修飾されるもの、②比較の助詞と共に起るもの、の二点を基準としたい。また、渋谷(1993)が指摘する形容詞化の三段階の(Ⅲ)「評価的属性段階」は、いわばテンスを持たないと言い換えられるだろう。したがって、少なくとも非過去の形態を有している必要があると考えられる。したがって、③タ形でない(ル形である)、という形態面も条件に加えておきたい。

3.2 対象とする可能形式

対象とした可能形式はレル、ラレル、可能動詞、デキルとした。これらの形式は近世期において豊富に用いられるものである。なお、デキルのうち「用事ができる」「嫁入道具ができた」などのように、可能形式でなく物体の完成を表わす自動詞とすべきものは除外してある。また、特に近世前期には「デキタ」で評価を表すものがある。例えば、以下のような例である。

(8) あれが屋敷の抱への相撲。よう関取さまあ、見事な勝ち、出来た。 (双蝶蝶曲輪日記 p.190)

こういったデキルはタ形で現れるのが通常であり、現代語でいえば「よくやった」といった意味である。たしかに評価を表しているように思われる。

しかしデキルは近世後期以降に可能形式化することが渋谷(1993)、原口(1985)によって明らかにされている。したがって、(7)のような近世前期のデキタなどはデキルがまだ可能形式化する以前の用法であると考えられる。デキルの可能表現化にこういった用法が関わったか否かも検討課題である。

また、この場合の「デキタ」が表わしているのは実現結果からの含意である。一方、可能表現

の表す「評価」は、渋谷(1993)が指摘するように、恒常的な属性段階である。故に実現を表わす形は本稿の考える「評価」とは異なる。そのため、本稿では(8)のような用例は除いて考えたい。

以上のようにデキルについては明らかに自動詞用法とみなせるもの、デキタの形を除外してあるが、レル・ラレル・可能動詞は全例が対象となる(ただしレル・ラレルのうち受身や尊敬と解釈すべき用例も除外してある)。そこで、採集されたこれらの形式の用例数を挙げておく。これらは、後掲する評価的用法を含む全例である。

(9) 採集された用例数全体

可能動詞：412 例

レル：905 例

ラレル：258 例

デキル：217 例

以下の4節では、これらの可能形式別に、ル形であるもののうち、先述の基準①程度副詞によって修飾される、あるいは②比較の助詞と共に起する、を満たす用例を全例挙げる。

4. 基準を満たした用例の揭示

4.1 可能動詞の場合

渋谷(1993)で評価的用法を表すものが多いとされる可能動詞の場合を見ていく。まず、①程度副詞によって修飾される用例である^{註1}。

(10) 是ちやアかくべつ¹のめるわへ。(通客一盃記言 p.184)

(11) モシ番頭さんこれは何といふ地だねへ」「これは本國織と言つて中々²ふめる代呂物ヨ。
この帯じやア着物がわるいとうつらねへ。これで晴着をこしれへねへ」

(春色恋廻染分解 初・25ウ)

(12) 中居「そんな悪口斗り。ぬたの鉢の高名とやらいわずと、つぎめに一ッ呑なませんか」
犬順「こいつア二ばん³はなせる夫人だ」

(阿蘭陀鏡 p.90)

(13) 中居「ハイハイわたしがくすりは二寸一丁⁴いけまする」

(虚辞先生穴賢 p.361)

これらは「カクベツ」「ナカナカ」「チョット」などの程度副詞で修飾される例である。「一番」については程度副詞とはいいがたいが、序列を付ける点で程度副詞に準じてよいと考える。

次に、②比較を表す語と共に起した例である。今回の調査では「ヨリ」と共に起した例は見当たらなかったが、「～の方が」と比較しているものは見出された。

(14) しかし大根と出くわせば、また鱈十郎の方がいけるが、下手六はモフごもく場でなと見てやらねばならんて。

(諺譚の宿かへ p.158)

この用例は「鱈の方がおいしい」という文脈で、食材としての味の良さが「大根」と比較され、「鱈」の方が上位に位置づけられている。これも、評価的用法としての統語的特徴を有する例と考えてよいだろう。

以上のように用例はごく少数であるが、可能動詞には、近世期にも確例といつてよいものが確認される。

4.2 レルの場合

次に、レルの用例に①または②の基準を満たすものがあるか否かを見ていきたい。まず、先に可能動詞の時に見たように「ナカナカ」と共起した例のみ見られ、それ以外に程度の意味を有する副詞に修飾される例は見当たらない。以下に「ナカナカ」と共起する全4例を全て挙げるが、程度副詞とみなしてよいか躊躇する例である。

(15) 人の一たびは、すぐ通りのならぬちまたぞかし。「脇からの添へ知恵にては、なかなかさとりるる道にあらず。
(好色敗毒散 p.412)

(16) しはらくありてのたまひけるハ、おの / \ はる / \ の御出なる程に、いつもより一きハ手ぎハにはくべしと種々思案をするに、虫 / \ はかれそうにもなし
(一休はなし 巻1)

(17) これは頃日普請いたされたか、結構になりました。これではなかなか / \ 表からはいられますまひ。いざ裏へ廻りましょ
(狂言記拾遺 巻一・12 オ)

(18) 此ひでりにて、われ / \ がすみかなし。いかゞせんといひければ、一つの老むしがいはく、だんこうもときによる。このひでりにてハ、なか / \ 水にすまれずと云とに
(怪口蓬萊山 巻4)

以上の用例は、いずれも程度を表しているとは解釈しがたいように思われる。「なかな」はレルの程度を叙述しているのではなく、否定辞と呼応して「容易には当該の動作が実現しない」といった意味を表わしている。したがって、先に挙げた(11)とは、意味的に相違する。また(15)(16)のナカナカはそれぞれ「あらず」「なし」に係っていると考えられるものである。

レルには程度副詞によって修飾される例が見当たらず、唯一、程度副詞の意味もある副詞ナカナカもあるが、程度副詞として機能している例ではない。

次にヨリなど比較の助詞と共起した例を探してみると、調査範囲内には見当たらなかった。

このように、近世期のレルの用例には、評価的用法の確例が見いだせない。しかし、このことは「近世期のレルに評価的用法はない」ことを必ずしも意味しない。調査した文献資料にたまたま姿を現さなかった、という可能性があるためである。ただし全用例数はレルが最も多い(可能動詞の倍以上。(9)を参照)であるにも関わらず確例が見られないことから、レルが評価的用法を有していたという蓋然性は低い、あるいはあったとしても極めて稀であったとの推測は成り立つ。

4.3 ラレルの場合

次に一段・カ変動詞に接続するラレルの場合を確認する。まず、ラレルの用例には、基準①または②を満たす用例は確認されなかった。松下(1930)の挙げる「二度と見られた顔ではない」(1節参照)に近い用例は見られた。以下に例を挙げる。

(19) 山梔は水と黄色と別 / \ になつて焼筆の痕がしつかり残つて、イヤハヤ見られた物ぢやアねへ。
(浮世床 p.356)

たしかにこの例は「見るに値しない」といった評価の意味を有しているように見える。またタ形ではあるが連体修飾節であるため過去テンスではない。だが、程度副詞に修飾される等の客観的基準によっては判断できない。

したがって、(19)のような位置づけの難しい用例はあるものの、本稿の基準に適う確例は、近世期のラレルには見いだせないと言える。

4.4 デキルの場合

最後に、デキルの場合を見る。デキルについては、程度副詞に修飾される例が3例見られ、比較の助詞と共起する例は確認されなかった。以下に用例を挙げる。

- (20) 狂言も格別よく出来るは。 (八笑人 p.164)
- (21) てる「あの幸四郎ナモシアノ義兵衛の役ナいつこうよふでき升ナ」露「あゝいふ事はよふ似あう (粹の曙 p.297)
- (22) 左次「なんとふざけつこなしとして、拵へてくれねえか。野呂公はなか／＼出来るぜ。それともそつちで出来さうもなくば、たのむめえ。」 (八笑人 p.83)
- 一方、次のように一見すると程度副詞のように見える用例もあるが、程度副詞として解釈すべきではないと考えられる。用例を挙げる。
- (23) こりアいゝよ死ぬほどほしいが今はちつと相談ができませんからあした返うれずにみたら持てお出なんし。 (錦之裏 p.66)
- (24) 酒もやめ、遊びもやめ、それでなければ、中々勘当の詫びはできません。 (古今秀句落し噺 p.100)
- (25) 万事が自由にはなつたが、なか／＼むかしの役者の真似はできねへ (浮世風呂 p.300)

用例(23)は「ちつと」とある。だが、同時に「今は」とあり、一時的な状態であることが示されている。その点で、恒常的な属性とは考え難い。

次に用例(24)(25)は「中々」と共起する例であるが、4.2節で見たように、「容易には当該の事態が実現しない」といった意味用法であると考えられる。現代語「ナカナカ」は、肯定形述語に係ると程度副詞相当に、否定形述語に係ると陳述副詞相当に働くことが指摘されており(飛田・浅田 1994)、またその傾向が近世期の文献においても認められることが黄(2016)や福井(1996)により確認されている。したがって、同じく近世期の用例である(24)(25)の「ナカナカ」も、積極的に程度副詞であるとは判定しがたいと思われる。

しかし、デキルにおいてはわずか3例ながら、(20)～(22)のように客観的基準を満たす確例が見いだされることは重要である。

4.5 用例調査まとめ

以上、可能動詞、レル、ラレル、デキルを対象に、客観的基準によって評価的用法を有していると認定される用例を掲示した。可能動詞、デキルには確例が認められるが、レル、ラレルには見出しがたいという結果を得た。

では、これらの用例には、程度副詞で修飾される、比較の助詞と共起する、という特徴以外に、何か特徴はないだろうか。5節では可能動詞を、6節ではデキルを取り上げ、非評価的用法の場合と比較しつつ、これらの例の特徴を考えてみたい。そのことにより、評価的用法の歴史的位置づけを確認することにする。

5. 可能動詞の評価的用法の特徴

5.1 肯定と否定

4.1 節で、程度副詞により修飾される用例を4例、比較形式「～の方が」と共起する例を1例挙げた。

先に挙げた5例を抜粋すると、「かくべつのめる」「中々ふめる代呂物」「一ばんはなせる夫人」「一寸一丁いけます」「鰯十郎の方がいける」といった例であった。一見して気づかれるように、全例が肯定形である点に共通点がある。

渋谷(1993)が評価的意味を持つとして挙げた用例も、3例中2例が肯定形であった。再掲する。

(5) おらア昔の面影もなし、当時おあてがひときてゐるからはなせねへはな。銭がつかへねへので抛なく老実さ (浮世風呂 四・中)

(6) サアそふ聞いたら、たまらなくなつて来た。眼公々々、ちよいと何ぞのめるものをす。 (八笑人)

(7) (伊)「なんぞくへる物がござんすかね」(加)「いゝにやモウ、やつぱりタベの通りじやはいナ」 (道中粹語録)

このように評価的意味を有する可能動詞は、むしろ肯定形に偏って現れるのであるが、このことを歴史的状況から眺めると、興味深い現象と捉えられることになる。というのも、日本語の可能表現は歴史的に、ほぼ全ての可能形式が否定形で先行して出現・発達し、古今を通じて否定形に偏るからである。このことは可能動詞も例外ではなく、中世末期に出現した「読むる」(近世以降の可能動詞の淵源であると考えられる。坂梨 2006、山田 2003、青木 2010、三宅 2016 等参照)は否定形に固まって現れ、近世以降の可能動詞も同様に否定形に集中する。

そのことを示すため、宝暦年間(1751-1764)以降を後期、寛延(1748-1751)以前を前期とし、上方語・江戸語にわけて可能動詞の肯定・否定率を以下に示す。

表1 近世期可能動詞の肯否割合

地域	肯定		否定	
	用例数	割合	用例数	割合
前期上方	17	27.0%	46	73.0%
後期上方	48	31.2%	106	68.8%
後期江戸	39	20.0%	156	80.0%

以上のように、可能動詞は一貫して否定形が7割～8割と多いが、評価的意味を有する場合はむしろ逆で、そのほとんどが肯定形で現れる。

この点については、可能動詞の出自と考えられる「読むる>読める」にも認められるものである。近世初期には次の用例が見られる^{注2}。

(26) 先よりおの / \ 書てもらいけるハ一字もよめず(略)御望の通、なが / \ と大文字をかきて、よくよめるを仕べし (一休はなし 巻2)

これは近世初期において肯定形で使用される例であるが、程度の高さを表わす「ヨク」が共起している。文脈から意味を推測すれば、「大変読みやすい」といった意味かと思われる。

このように、可能動詞は成立初期からわずかながら肯定形も散見され、かつ程度副詞に類するものが共起する例が現れる。さらに遡ると、室町期のキリシタン文献「日葡辞書」には次のような語例が見える。

(27) Yome、uru、eta ヨメ、ムル、メタ(読め、むる、めた)文書なり文字なりが読みと

れる。例、Ano fitono teua yô yomuru. (あの人の手はよう読む) あの人の書いた文字は読みやすい。 (『邦訳日葡辞書』 pp.826-827)

この例も「ヨウ」で連用修飾されるが、やはり肯定形である。程度副詞と共に起する場合に肯定形で用いられるという点は、成立初期から認められる特徴であると考えられる。

以上、可能動詞およびその淵源と目される「読む」は程度副詞相当のものと共起する場合、専ら肯定形に偏って現れ、可能動詞全体として見れば否定形に偏ることと相反する点に特徴があることを指摘した。

5.2 評価対象

次に、評価されるもの(以下、「評価対象」)がどのようなものか、という観点から見てみよう。まず、「かくべつのめる」「一寸一丁いけます」「鱈十郎の方がいける」といった用例では、「飲食物」に対する評価が述べられている。渋谷(1993)で挙げられる用例(→(5)(6)(7)参照。本稿では確例から除いたもの)も、「飲食物」が多かった。次に「中々ふめる代呂物」は飲食物ではないが、品物に対する評価が述べられている。全体としては、動作の対象物に対する評価が述べられる場合が多い。

これにたいして、「一ばんはなせる夫人」(→(12))はそれ以外の用例とは異なり、動作主としての能力の高さを評価しているように見える。しかし、文脈を踏まえると別の見方もできるのではないと思われる。今一度、用例を再掲する。

(12) 中居「そんな悪口斗り。ぬたの鉢の高名とやらいわずと、つぎめに一ッ呑なませんか」
犬順「こいつァ一ばんはなせる夫人だ」 (阿蘭陀鏡 p.90)

ここでは、「悪口ばかり言っていないで、まあ一杯飲みなさいよ」という「中居」の発言を受け、その夫人に対して「一ばんはなせる」と評価している。ここで評価されているのは、話し相手としての性質、すなわち「聞き手」としての質であるとも考えられる。元その他動詞文では、「夫人ニ話す」「夫人ト話す」のような、話し相手であるニ格あるいはト格に現れる名詞が、「はなせる夫人」のように連体修飾されていると考えられる。

このような、人物に対する評価を表わす場合は、動作の対象人物である、という特徴は現代でも同様であると思われる。例えば「話せる上司」であれば、上司の会話能力の高さでなく、話し相手と捉えた場合の評価を述べていると考えられる。同じく「使えない部下」であれば、「部下」が何かを使う能力が無いのではなく、「部下」を手足のように使う対象とみなし、「使う」対象物としての評価(の低さ)を述べているものと考えられる。同様に、「彼は食えない人だ」であれば、「人を食う(人をばかにする、みくびる)」に対するものであって、「人が食う」に対応するものではない。元の五段動詞文でヲ格対象に現れる名詞句への評価である。

このように、可能動詞が評価を下す場合、専ら動作の対象に対する評価に偏る、といえるように思われる。

6. デキルの評価的用法の特徴

6.1 肯定と否定

次にデキルの場合について考える。改めて用例を挙げる。

(20) 狂言も格別よく出来るは。 (八笑人 p.164)

- (21) てる「あの幸四郎ナモシアノ義兵衛の役ナいつこうよふでき升ナ」露「あゝいふ
事はよふ似あう (粹の曙 p.297)

- (22) 左次「なんとふざけつこなしとして、拵へてくれねえか。野呂公はなか／＼出来るぜ。
それともそつちで出来さうもなくば、たのむめえ。」 (八笑人 p.83)

可能動詞と同じく、デキルも肯定形に偏っている。この点は可能動詞の評価的用法と共通した特徴である。

可能動詞の場合は、全体として否定形に偏る中であって、評価的用法の場合は肯定形に偏っていた。では、デキルの場合はどうであっただろうか。以下に、近世後期のデキルの肯定・否定割合を示した表を挙げる。

表 2 近世後期のデキルの肯否割合

地域	肯定		否定	
	用例数	割合	用例数	割合
後期上方	27	26.2%	76	73.8%
後期江戸	32	28.1%	82	71.9%

以上のように、デキルも可能動詞と同じく、全体としては否定形が 7 割ほど現れる。それにも関わらず評価的用法の場合は肯定形での使用に多い。したがって、評価的用法である場合は肯定形に偏る、という特徴は、当期の可能表現全般に共通する特徴と考えられる。

ただし用例数はわずか 3 例であり、この結果から近世期におけるデキルの評価的用法は肯定形に集中していたと説得的に示すことは難しい。今後はさらに調査範囲を広げ、この特徴が近世期の多くの資料で観察される様相と一致するか否かを確認することが必要となる。

6.2 評価対象

次に評価対象を見ると、可能動詞の場合とは異なり「動作主」に対する評価である。

デキルにおけるこの特徴は、現代語でも同様であると考えられる。例えば渋谷(1993)が評価的用法として挙げる「おぬし、できるな」「あいつはなかなかできる」も動作主としての「おぬし」「あいつ」の能力の高さを評価していると考えられる。

このように専ら動作対象に対する評価を下す可能動詞に対して、デキルの場合は専ら動作主に対する評価を下す、という特徴が見出された。

7. おわりに

以上、近世期文献の調査から、評価的用法の確例がレル・ラレルには見られないが可能動詞とデキルには認められること、その場合どちらも肯定形での使用に偏ること、可能動詞は評価対象が専ら動作対象であり、デキルは評価対象が専ら動作主であることを指摘した。

今回、可能動詞を扱う際には次のような「おえない(負えない)」の用例は取り上げなかった。

- (28) おへねへけびぞうだア (傾城買四十八手 p.241)

- (29) おへねへ気がへだ (傾城買四十八手 p.249)

- (30) うでへくいつきしつかりとはのあとをつける。仁「いてへわな。おへねへ気ちげへづらだ。 (起承転合 p.93)

その理由は条件①②③を満たしていないためであるが、こうした「おえない（負えない）」は渋谷(1993)で評価を表わすものとして挙げられている。本調査の限りでは、「おえない」は江戸語資料にのみ確認され、上方語資料には見出されない。このような東西差はなぜ、どのように形成されたか、またなぜ「おえない」が慣用的にマイナス評価を表わすものとして使用されるようになったか、といった点については今後検討していく必要があると考えられる。

デキルの可能形式化についてはなお検討の余地があると思われるが、デキルの可能形式化を追究するに際して、評価的用法を表わす場合が成立当初である近世後期に存在する、といったデータを踏まえた考察が可能になる。その意味で、本稿は可能形式の歴史記述にあたって必要となる視点の一つを提供したものと位置づけられる。残した問題は多いが、全て今後の課題とすることにした。

注 1 用例(11)について解釈を施す。基本形「踏む」には「値段をつける。評価する。鑑定する。判断する。」という意味があることから、ここでは「(まあまあ) 高い値段が付けられる」の意であると思われる。

注 2 本稿では (26)の用例は確例として挙げなかった。その理由は二つある。まず、17 世紀は「読める」にのみ集中しその他の可能動詞（例えば「使える」「歩ける」「通れる」など）が現れず、「可能動詞」という文法的手段と言えるか否かが問題となるためである。もう一つは、「読めやすき」「読めにくい」のように、現代語の可能動詞では文法的に認められないヤスイ／ニクイの承接例が確認され、「可能」というより「自動詞」としての域を出ていない可能性があるためである。17 世紀の例を挙げる。

・なが / \ と書て よめやすき は是なりと宣へば

(一休はなし 中 1668 年)

使用資料一覧

一部、以下の記号で示す。●＝『日本古典文学大系』、○＝『新日本古典文学大系』（ともに岩波書店）／■＝『日本古典文学全集』、□＝『新編日本古典文学全集』（ともに小学館）

《キリシタン資料》日葡辞書…『邦訳日葡辞書』岩波書店《狂言》虎明本…『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社／狂言記・狂言記外五十番・続狂言記・狂言記拾遺…『狂言記の研究』『狂言記外五十番の研究』『続狂言記の研究』『狂言記拾遺の研究』勉誠社《浄瑠璃》曾根崎心中・堀川波鼓・冥途の飛脚・夕霧阿波鳴渡・大経師昔暦・鍵の権三重帷子・博多小女郎波枕・心中天の網島…『近世文学総索引近松門左衛門』教育社／五十年忌歌念仏・丹波与作待夜の小室節・重井筒・山崎与次兵衛寿の門松・女殺油地獄・心中宵庚申…●／今宮心中・長町女腹切・生玉心中…□／ひらかな盛衰記・夏祭浪花鑑・仮名手本忠臣蔵…●／芦屋道満大内鑑・狭夜衣鴛鴦剣剣…○／双蝶蝶曲輪日記…□《歌舞伎》けいせい浅間嶽・おしゆん伝兵衛十七年忌…●／好色伝受…『好色伝授 本文・総索引・研究』笠間書院／幼稚子敵討…●《浮世草子》好色一代女・男色大鏡…『近世文学総索引井原西鶴』教育社／好色一代男…□／好色万金丹…■／けいせい色三味線（京・大坂の巻）・けいせい伝受紙子・世間娘気質…○／傾城禁短気…●／好色敗毒散…■《上方断本》私可多咄・一休はなし・軽口大わらひ・当世手打笑・当世口まね笑・鹿の巻筆・軽口露がはなし・初音草断大鑑・露新軽口はなし・軽口御前男・軽口あられ酒・露休置土産・軽口福蔵主・軽口出宝台・絵本軽口福笑・新軽口初商い・軽口独機嫌・軽口蓬莱山・軽口笑布袋・軽口大黒柱・軽口五色帟・時勢話綱目・歳旦話・軽口筆彦咄・新話違なし・笑の友・麻疹断・玉尽一九断・臍の宿かえ・会席断袋・春興断万歳・

新栗毛・はなしの種・落嘶千里藪・嘶の魁二編・万燈版ばなし初二編・大寄嘶の尻馬初編…『嘶本大系』東京堂出版《江戸嘶本》鹿の子餅・口拍子・一のもり・鳥の町・高笑ひ・鯛の味噌津・気のくすり・柳巷訛言・百福物語・独楽新語・振鷺亭嘶日記・嘶手本忠臣蔵・詞葉の花・無事志有為・馬鹿大林・東都真術・口取肴・落嘶屠蘇喜言・東海道中滑稽譚・新作可楽即考・古今秀句落し嘶・春色三題嘶・梅屋集…『嘶本大系』東京堂出版《上方洒落本》陽台進編・妣聞秘言・新月花余情・聖遊郭・月花余情・異本郭中奇譚・風流裸人形・虚辞先生穴賢・短華藥葉・粹の源・北華通情・眸のすじ書・うかれ草紙・十界和尚話・南遊記・昇平楽・嘘之川・なにはの芦・竊潜妻・左登能花・粹の曙・箱まくら・色深狹睡夢・北川蜆殻・老樓志・風俗三石土・千歳松の色…『洒落本大成』中央公論社《江戸洒落本》郭中奇譚・遊子方言・辰巳之圖・甲駅新話・道中粹語録・卯地臭意・通言総籙・古契三娼・傾城買四十八手・繁千話・綿之裏・取組手鑑・仮根草・傾城買二筋道・松登妓話・恵比良濃梅・起承転合・傾城買杓子木・通客一盃記言・船頭部屋…『洒落本大成』中央公論社《上方滑稽本》穴さがし心の内そと…『近代語研究 第四集』武蔵野書院／諺語の宿替…『諺語の宿替』太平書屋／諺の宿かへ式編…『江戸明治百面相絵本八種』太平書屋《江戸滑稽本》浮世風呂…●／浮世床…■／花暦八笑人…『花暦八笑人』岩波書店《江戸人情本》春色恋廻染分解…『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう出版

*用例の引用に際しては、理解に必要な情報を（）で補った。私に一部句読点等を補い、通行字体に改めた箇所がある。

参考文献

- 青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
 黄龍夏(2016)「驚流狂言台本における「なかなか」」『日本語文学』75
 坂梨隆三(2006)『近世語法研究』武蔵野書院
 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1)
 磯岡昭夫(1967)「江戸語・東京語における可能表現の変遷」『国文学言語と文芸』54
 原口裕(1985)「可能表現「スルコトガデキル」の定着」『国語と国文学』62(5)
 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
 福井淳子(1996)「「なかなか」の語誌—江戸後期から明治期を中心に—」『国語語彙史の研究』15
 松下大三郎(1930)『標準日本口語法』中文館書店
 三宅俊浩(2016)「可能動詞の成立」『日本語の研究』12(2)
 山田潔(2003)『玉座抄の語法』清文堂出版